

詩的神話の誕生

～ツヴェターエワの「山の詩」～

前田和泉

1.

"Ты меня не любишь больше: / Истина в пяти словах." (III, 134) *1 という一節をマリーナ・ツヴェターエワがしたためたのは1923年12月12日、おそらくは3カ月にわたるコンスタンチン・ロジェーヴィチとの関係に終止符が打たれた直後のことである。奔放な恋多き詩人として知られるツヴェターエワではあるが、ロジェーヴィチに傾けた感情のひとかたならぬ激しさは、逆にそれが断ち切られた後の虚脱感の中に垣間見ることができるだろう。「あなたは私をもう愛していない」という「五語の真実」に、ツヴェターエワはエクスクラメーション・マークを打つことすらできないでいる。

夫も娘もある高名な詩人と、三歳年下のポーランド系ロシア青年との「不倫」は、当時プラハの亡命ロシア人社会では大きなスキャンダルとなっていた。白軍に従軍した経験を持ちながら、のちにフランス共産黨員としてスペイン内戦や仏レジスタンス運動に参加するなど、いささか軽薄なアヴァンチュリストとも見えるロジェーヴィチは、同時代人の目には必ずしも好ましい人物として映っていたわけではなかった。「マリーナと彼とはむろん不釣り合いだった」と、二人を知るマルク・スローニムは言う*2。皮肉屋で、芸術に対する造詣にも欠ける（「あなたたちがどうしてそんなにマリーナ・ツヴェターエワの詩に感激するんだか、僕には全く理解できませんね」*3）ロジェーヴィチには所詮、いつもながら過剰なまでのツヴェターエワの感情の流露を受けとめきれるはずもなかったが、しかしツヴェターエワはこの希望のない関係にのめり込むのを止めることはできなかった。ロジェーヴィチと別れたのち、精神的な痛手を昇華すべく執筆された自伝的ポエマ「山の詩」の2章「どうしてこの目に /（時は十月で五月ではないというのに） / ああの山は天国だったのか」という一節には、そうしたツヴェターエワの内的葛藤が現れているといえるだろう。「あの山」は作品の主舞台であるが、二人が逢瀬を重ねたプラハ郊外のペトシン丘がイメージされている。また、「時は十月」というのは、ちょうどツヴェターエワがロジェーヴィチと関係していた時期を指す。ところで、ここで「五月」ではないとわざわざ断りを入れているのは、《май》と《рай》とを掛けるためでもあるが、それと同時に、「五月」というのはツヴェターエワにとって夫セルゲイ・エフロンのおもい出と密接に結びついた月でもあった。ツヴェターエワがエフロンと初めて会ったのは1911年5月、クリミアはコクテベリでの出来事であった。18歳のツヴェターエワと17歳のエフロンは一瞬のうちに恋に

落ち、翌年1月に結婚することになるが、コクテベリの海岸での二人の出会いはほとんど伝説のように語られている。「砂浜に落ちている石のうちで、どれが私の好きな石か当てることのできた人と結婚する」という夢のような決意をかねて公言していたツヴェターエワは、ほどなくその夢物語を現実のものとしてしまったのである。二人が会ったほとんどその日にエフロンが砂浜で掘り出し、ツヴェターエワに手渡したという紅玉髓を、「私は今日に至るまで肌身離さず持っている」・・・（《Истрия одного посвящения》）*4。

この「五月」の出会いを、運命的なものとしてツヴェターエワが自ら好んで伝説化していた様子は、二人が革命後の内戦下の混乱で生き別れになっていた1921年に書かれた次の作品の一節からもうかがえる。

Смуглой оливой
Скрой изголовье.
Боги ревнивы
К смертной любви.

浅黒いオリーブで
枕元を隠せ
死ぬほどの愛を
神々は妬むから

Каждый им шелест
Вяnten и шорох.
Знай, не тебе лишь
Юноша дорог.

どんな衣ずれの音も
彼らにはよく聞こえる
青年を愛しく思うのは
おまえだけではない

Роскошью майской
Кто-то разгневан.
Остерегайся
Зоркого неба.

五月の豊饒が
だれかの逆鱗に触れてしまった
目ざとい天に
気をつけろ

（《Разлука 4》 II, 107）

エフロンが自分から奪われたのは、神々が自分たちの愛に嫉妬したからだという内容だが、ここで「五月の豊饒」という表現に注目されたい。二人が出会った「五月」は、クリミアの美しい風景と相まって「豊饒」という語を導き出している。ツヴェターエワにとって「五月」は、「運命的」なエフロンとの出会いと、二人の思い出の場所であるクリミアの「豊饒」の記憶へと通ずるキーワードだった。しかし翻って今この「十月」にツヴェターエワが恋しているのは、皆に祝福されて結ばれたエフロンではなく、浮薄な青年ロジェーヴィチであり、しかもそれは「姦通」という名の下で断罪される行為である。

このような「五月」と「十月」の対照を考えると、4章に見られる「ペルセフォネー」への言及が理解されるだろう（「ペルセフォネーのざくろの実よ

！」)。ギリシア神話によれば、大地の女神デーメーテルの娘であるペルセフォネーは、冥界の王ハデスに見初められ、地下の王国へとさらわれる。これを知った母デーメーテルは嘆き悲しみ、そのため地上の穀物は実るのをやめ、草木は花咲かなくなってしまう。ゼウスはデーメーテルの嘆きを鎮めるため、ペルセフォネーを母のもとへ返すようハデスに命ずるが、そのときすでにペルセフォネーはハデスの与えたざくろの実を口にしてしまっていた。冥界のざくろの実を味わった者は必ず再び冥界へと戻ってこなければならない。そのためペルセフォネーは、一年の半分は地上で、残りの半分はハデスのもとで暮らすこととなる。そのため、ペルセフォネーが地下にいる間はデーメーテルが嘆き悲しむので地上は冬となり、彼女が戻ってくるとデーメーテルの嘆きもおさまるので地上には春が訪れる・・・。

ここでペルセフォネーはある種の二面性を帯びることになる。すなわち、デーメーテルの従順な娘としての「春のペルセフォネー」と、ハデスの愛人としての「冬のペルセフォネー」である*5。「実ゆえに滅んだペルセフォネーよ！」とツヴェターエワは唄う。しかしツヴェターエワは、冥界での暮らしがペルセフォネーにとって必ずしも強制されたものであるとは受けとめていない。ツヴェターエワのペルセフォネーはむしろ、春と母を失うことを承知で自覚的に「ざくろの実」を口に入れている。であるからこそ、そうしたペルセフォネーの姿は、「五月の豊饒」を失うことを承知でロジェーヴィチとの愛に堕ちていこうとする自らの姿と重なり合うのである。「山の詩」が執筆されたのは1月、それはまさに、母と春を捨て、ハデスとの愛に生きる「冬のペルセフォネー」の季節であった。プラハの冬の凍てつきの中、ツヴェターエワの脳裏には失われたハデス＝ロジェーヴィチの姿が浮かんでやまない（「冬の凍てつきの中、どうしておまえが忘れられよう？」）。

「五月」と「十月」、「春のペルセフォネー」と「冬のペルセフォネー」との葛藤の中で、しかしツヴェターエワは「滅ぶ」ことを知りつつ、結局は「実」を口にしたのだった。5章「——僕を取るがいい！君のものだ・・・」という一節は、まさしく二人が結ばれる場面である。ところで、ここに至るまでの流れを追っていくと、二人を結びつけるのに重要な役割を果たしているのが先ほども触れた「山」であるのに気づくだろう。ポエマの“タイトル・ロール”でもあるこの「山」は、単に二人が結ばれる場であるにとどまらず、擬人化され、自ら主体的に、ほとんど力づくで二人を結びつける「女衞」として描かれており（3章）、むしろ恋人たちの方が自分たちでも訳もわからぬまま、圧倒的な「山」の力の前になすがままになっている（「山は私たちが仰向けに押し倒し／引き寄せた 「横たわれ！」と」）。前述のように、プラハ郊外に実在するペトシン“丘”（холм）をモデルとしながら“山”（гора）と呼ばれ、恋人たちを引き合わせ、のみならず自ら口を開き、神託の如く言葉を下し、さらには

二人の破局を嘆き悲しむ・・・こうした「山」の姿は、おそらくはツヴェターエワ自身の情念の混沌が具象化したものでもあろうが、しかしそれだけでは説明のつかないほど多彩なメタファーとアレゴリーに満たされている。いったいツヴェターエワはこの謎めいた、不可解な「山」に何を託そうとしていたのだろうか？

2.

ツヴェターエワが一人娘アリアードナを連れて亡命したのは1922年5月のことである。二人は短期間のベルリン滞在を経て、同年8月、夫エフロンの待つプラハへと移った。プラハ大学に籍を置く大学生であり、持病の結核のためにサナトリウムでの療養生活を繰り返す元白軍兵エフロンに代わって家族を支えながら、決して裕福とはいえない暮らしの中で、亡命後のこの時期、ツヴェターエワは驚くほどの量と質の作品を生み出している。30代初めの、おそらくは詩人としても女性としても非常に充実していたであろうツヴェターエワの溢れんばかりのエネルギーは、ロジェーヴィチという人間と出会うことで、堰を切ったようにほとばしり、彼の中へと注ぎ込まれていった。しかし実際問題としてそれは「不倫」という極めて不安定な関係であり、ツヴェターエワは常に「家庭生活」や「日常」、つまりロシア語で言う《быт》との葛藤にさらされていたといえるだろう。このような《быт》との対立は、「山の詩」の中にも色濃く映し出されている。「山の詩」の舞台となるのは、二人が結ばれた「山」と、その麓に広がる「町」であるが、この二つの場の対比はそのまま詩人と《быт》との対立を代弁している。例えば、5章「だからこそ私たちはこの世に——／愛し合う天上人として（небожителями любви）生まれたのだ！」という一節からもわかるように、ツヴェターエワは二人の関係を純粹な、「天上」を指向するものとして位置づけている。これに対し、二人が最終的に破局して「山」を下りる場面は、「山は嘆いた、私たちが別々に／ぬかるみを通って下界へとおりてゆくことを／／誰にもおなじみの生活へと／群衆——市場——バラックへと・・・」（7章）と描かれており、ここでは対照的に、恋人たちが結局は「生活（жизнь）」＝《быт》に敗れて「町」へ帰ってゆくという象徴的な情景が提示されている。

このように「町」は《быт》を体現する場として描かれているが、ではその「町」を「見下ろして」（1章）そびえる「山」は何を意味するのか？

恋人たちを別れさせる「町」＝《быт》に対して、二人を結びつける「山」はその対極にある、言うなれば《бытие》を体現する場であるということは多くの研究者によって指摘されている*6。ところでこの「山」の描写を詳しく見てゆくと、1章ですでにいくつかの興味深い特徴が現れているのに気づくだろう。まず3連に「巨人（титан）」というイメージが呈示されている。これ

はギリシア神話の巨人ティーターン一族を指しているが、「山」と「巨人」という結びつきはさらに、フィリーナに登場する巨人スヴァトゴールへの連想を促す。テクストの中で具体的に指摘されてはいないが、ここでツヴェターエフは当然、ギリシア神話ばかりではなく、《святая гора》＝「聖なる山」という名を持つこの巨人の姿も念頭に置いていたはずだ。さらに《Та гора была, как гром》という一節からは、スラヴ土着の異教神ペルーンの姿が想起されるだろう*7。さて、ティーターン、スヴァトゴール、そしてペルーンという3人の神話上の人物には一つの共通点がある。周知の通りギリシア神話世界の最高神はゼウスであるが、そもそもゼウスはティーターン一族の末弟クロノスの子であった。世界を支配していたクロノスは自分の支配権が奪われるのを恐れ、生まれてくる子供たちを片端から呑み込むことにしていたが、その目をかいくぐって生き延びたゼウスはティーターン一族に反旗を翻し、これを征服してギリシア世界を統一する。ゼウスを頭に戴くオリュンポスの12神というギリシアの神々のヒエラルヒーはこの時から始まるのであり、裏を返すなら、ティーターン一族はそうしたヒエラルヒー成立以前の、原初ギリシアを象徴する存在であるといえる。

次にスヴァトゴールであるが、フィリーナに登場する英雄たちは、おおよそ3つのグループに分けられる。まず第1にイリヤ・ムーロメツやドブルィニャ・ニキーチッチなど、太陽公ウラジーミルに仕えるキエフ・ルーシの英雄たちである。第2がサドコなどのノヴゴロドの商人の系列である。フィリーナを中心となって活躍するのはこの両グループだが、スヴァトゴールはこのどちらにも属さない。彼は一節によるとキエフ・ルーシ以前の時代にその起源が求められる、「最も古い神話的タイプの勇士」*8である。つまり彼は、太陽公ウラジーミルを中心とした「円卓の騎士」的な英雄たちの勢力体系が成立する以前の古い時代に属している。イリヤ・ムーロメツと旅をしていたスヴァトゴールが、あるとき山の中で見つけた棺の中に寝転がって、蓋が取れなくなって窒息して死んでしまうという有名な逸話があるが、彼が自分の力をイリヤに託して死んでゆく場面は、一種の世代ないし時代の交替を象徴していると言われる。また、取っ手さえあれば大地を持ち上げることができると豪語していたスヴァトゴールが、野に落ちていた袋を持ち上げようとして地面にめり込んで死んでしまうという、よく知られたもう一つのエピソードからもわかるように、彼は自分の巨大すぎる力を制御できぬまま滅んでゆく。つまり彼は「より人間的な英雄の時代まで生きのびることができない」*8、言うなれば、「消え去る運命にある、生の古い段階を具現化した」*9存在なのである。

最後にペルーンだが、これは古来東スラヴで信仰されてきた土着の「異教神」であり、スラヴ世界にキリスト教という確固とした権威が定着する以前の存在である。以上のことから、ティーターン、スヴァトゴール、そしてペルーンは

いずれも、何らかの秩序や体系が確立する以前の、まだ世界が社会化されていない混沌の時代を象徴するものであることがわかる。

これを念頭に置くと、次の2章の1行目、(この「山」は)「パルナッソスでもシナイでもない」という一節が理解されるだろう。パルナッソスは、古代ギリシアにあったいくつかの神託の中でも、最も有名で権威のあった「アポロンの神託」が下されたデルフォイの神殿がある山である。アポロンはオリュンポス12神の重要な一角を占める神であり、従って「パルナッソス」は、ゼウスを中心としたオリュンポス・ヒエラルヒーを象徴する。一方「シナイ」は言うまでもなくモーゼが十戒を授かった山であり、旧約世界の律法体系はまさにこのシナイ山から始まるわけである。ということはつまり、いずれの山にしても何らかの「秩序」や「権威」を体現しており、ここでツヴェターエワがそうした「山」を否定することで、1章で提示された非社会的空間としての「山」の性格がさらに確認されるのである。

そうした「原初の混沌」としての「山」の姿は、実はすでに「献辞」の中にさりげなく示されている。この部分は、奇数行が《—UU—U—》、偶数行が《UU—U—》というabab型の韻律で書かれており、1連では1行目の《горы》=「山」(ただし《горы с плеч》という表現は「肩の荷がおりる」という慣用句である)と3行目の《горе》=「悲しみ」が、そして2行目の《горе》(「上へ」という意味の古語)と4行目の《горе》=「山」がそれぞれ韻律的に平行関係にある。1行目の「山」は「肩の荷がおりる」からもわかるように「重荷」という意味を帯びており、下向きの運動性を持つ。そのようなマイナス・イメージは3行目の「悲しみ」との呼応で強調される。一方、4行目の「山」は、2行目の「上へ」と韻を踏むことで、上向きの運動性、飛翔するイメージと結びつく。つまりここでツヴェターエワは、《гора》という語を軸にして、上下両方向の、互いに相反する運動性を重ね合わせているのである(このあたりは、ツヴェターエワが《холм》ではなくあえて《гора》という語を用いた効果が最もよく現れている箇所の一つでもある)。また2連では4行末の《горы》=「山」が2行末の《дыры》=「穴」と対応しており、ここでも「山」⇔「穴」という対義的な性質が重ね合わせられている。さらに1章に入ると、「山」でありながら「海」でもあり、そもそも女性名詞の《гора》でありながら男性的なイメージを付与されている。このような両義的性格や、「あの山は——世界だった」「悲しみは山から始まった」(1章4連)等の記述は、この「山」がいわば創世神話にしばしば見られる《мировая гора》であり、「山」という場がまだ原初的な未分化状態の世界であることを示唆している。

ところで秩序化された社会では、分類して何らかのカテゴリーに収めることのできない「混沌」は、しばしば「異端」として社会体系の中から排除され、タブーとして封印される。たとえばティーターン一族はゼウスに敗れた後、地

獄タルタロスに幽閉され、スヴァトゴールは棺の中で窒息死する。ペルーンの場合は聖ゲオルギー信仰にその名残をとどめているものの、ペルーンそのものは「異教神」とされている。ツヴェターエワの「山」が「褐色のヒースにうずもれて」（5章3連）いることは、この「山」もまたそうした「異教」性を帯びていることを示唆しているといえよう。ヒースは主に荒れ地に自生する植物で、キリスト教世界では古くから異教的なイメージと結びつけられてきた（例えばE・ブロンテの『嵐が丘』を想起されたい）。8章2連から3連にかけての「熊の壕や／十二使徒とも等しく／わが陰鬱なる岩窩を敬え」という謎めいた一節は、まさにこうした「異教」という視点から読み解くことができよう。一見してわかる通り、8章は韻律的にも構成的にも1章と同じつくりをしており、一種の円環構造を成しつつポエマの前半部分を締めくくっているが、「岩窩」《грот》という語が、1章でペルーンのイメージを引き出していた《гром》と同じ位置（3連1行末）にあることは、ここでツヴェターエワが読者の意識を再びスラヴ神話世界へ誘おうとしていることを示している。さてスラヴ神話に目を向けるとき、「熊」への言及からは家畜神ヴォロス（もしくはヴェレス）の姿が想起されるだろう（ヴォロスは技芸の守護神でもあり、「山の詩」の語り手が自らをこの異教神に比するくだりは、かの『イーゴリ軍記』で、詩人の祖型ともいべき「靈妙なるボヤーン」が「ヴェレスの孫」と称されていたのを連想させる）。さてイワーノフ、トポロフによれば、スラヴ神話には邪神が家畜を奪い、洞窟に隠すが、ペルーンがその洞窟を破壊して家畜を解放するというモチーフが見られる*10。この「邪神」は多くの場合、蛇ないしヴォロスとされるが、ここでツヴェターエワが自らをヴォロス神に重ね合わせていることは興味深い。「僕を取るがいい！」《На же меня!》（5章）という一節の中に、ヒロインが彼を「取る」という構図を見るならば、彼をヴォロスにさらわれて洞窟に幽閉される家畜になぞらえることもできよう。スラヴ神話世界では対決するペルーンとヴォロスが、「山の詩」では一種の共犯関係にあるのは、明らかに「山」と「町」との対立関係を反映している。敵対するペルーンもヴォロスもいわば同じ「異教」という平面上にあり、ここに「正教」という別の平面が介入してくる時、この両者はいうなれば「同類項」となる。彼らは共謀して、下界の《быт》——それは「混沌」を秩序化する「正教」の延長線上にある——から家畜を略奪する。ツヴェターエワにとって、彼らはどちらも「町」と対立する「異教」の同志である*11。

一方「十二使徒」は、現在も観光名所として有名なプラハの旧市庁舎の天文時計を指す。これは毎時ちょうどになると十二使徒の人形が出てきて鐘の音によって回るというからくり時計だが、問題なのは旧市庁舎の建物の方で、実は15世紀にここで、宗教改革を求めるフス派の人々が集まって会議を開いたという歴史的な背景がある。ボヘミアの宗教改革者ヤン・フス（1370?-1415）は、

世俗化したカトリックを痛烈に批判したため「異端」の烙印を押されて火刑に処せられた。つまり「熊」にしる「十二使徒」にしる何らかの正統的な権威に対するアンチテーゼとしての性格を持っており、これらと等しくわが岩窩を敬えということはすなわち、「山」のみならずヒロイン自身もまた「町」とは相入れない「異教者」であるという宣言をしているのに他ならない（1章3連で、「郊外の出口」にある彼女の家について言及されているが、「郊外の出口」は言うなれば「山の入り口」であり、この一節からも「山」と「町」の対立という図式の中でのヒロインの位置関係がうかがえる）。

さてこのように「異教者」として性格づけられた「山」であるが、（やがて訪れるであろう二人の別れを予期して「山」が嘆く場面である）6、7章の文体に注目してみると、興味深いことに気づく。戸惑うほどの《r》《p》音の乱舞の中に現れる《гора горевала》《гора говорила》といった表現は、聖書、とりわけ旧約でよく見られる「神はこう言われた・・・さらにこう言われた・・・」等の表現を模している。また、6章2連「山は言った、各々の願いは／その涙のままに叶う、と（Гора говорила, что коемужды / Сбудется — по слезам его）」は、黙示録22:12「見よ、私はすみやかに来る。そして私が与える報いは私と共にある。各々にその業のままに報いるためである（Коемужды воздастся по делам его）」（下線部は引用者）をパラフレーズしたものである。さらに7章末の「山の詩はみな／こうして書かれるのだ」という一節は、「山」という「神」が預言者たる詩人に語って聞かせ、それを詩人が書き留めるという「神託」「啓示」とも呼ぶべき形式であることを示している。つまり、もともとは「異教神」であったはずのツヴェターエワの「山」が（おとなしく「異教」に甘んじるペルーン等とは違って）、ここではいわば「正統神」の地位を乗っ取ってしまっているのである。

ただしこの「神」は「正統」に対する露骨なアンチテーゼである。「正統神」が「各々の業」に応じて、すなわち各人がどれほど「戒律」に忠実だったかによって人間を裁くのに対し、「山」は「涙」を基準にする（しかも「涙」に応じて「裁かれる」のではなく、「願いが叶えられる」のである）。さらに「ハガル」の扱いはこの「神」の性格を端的に示していると言えるだろう。社会化された世界では戒律を犯すものは罰せられなければならない。旧約では、アブラハムと姦通を犯した女奴隷ハガルは荒野へ追放される（創世記16:1-21:21）。しかし「山」は反対に、ハガルが追放されたことを嘆いている（6章3連）＊12。秩序化されていない「山」ではそもそも「戒律」自体が存在しない。従って「戒律」を犯して罰せられることもありえないのである（この「山」がヒロインの目に「天国」と映った理由はまさにここにある）。「私たち」を威圧するかのよう語る「山」は、シナイ山でモーゼに十戒を授けるエホバの姿を彷彿とさせるほどだが、両者の性格は全く対照的であることがわかるだろう。こ

うしてツヴェターエワが表面的に「正統神」を模せば模すほど、逆に「山」の「異端」は際立ってゆく。

3.

さて、このような「戒律」そのものを無化してしまおうという企てにもかかわらず、結局のところ恋人たちは前述のように「生活」に屈し、「山」を下りていったのだった。9章では、やがて時が流れ、二人の「天国」であった「山」自体が「町」に侵食されるであろうことが予告される。「山」は掘り返され、「私たちの幸せの廃墟」の上に俗物的な別荘が立ち並ぶ。「柵で埋めつくされる」（1連）「土地を裁つ」（2連）といった表現は、混沌状態にあった「山」に境界線が引かれ、整理され、秩序づけられてしまうことを示しているといえよう。そしてこのようにして築かれた別荘地を、ツヴェターエワは「夫たちと妻たちの町」（9章5連）と呼ぶのである。排他的婚姻制度の確立は、未開の人間が秩序化され、文化状態へと移行した象徴であるといっておいたであろう。例えばT. タナーはヴィーゴを援用しつつ、乱交と放縦の原初時代に婚姻が導入されることによって、野獣状態にあった人間は社会的な相関構造の中につなぎ止められるのだと述べている*13。あるいはバウハーフエンによれば、古代社会においてしばしば、いわゆる「神聖売春」（神に捧げる性行為の儀式）が行われていたのは、「婚姻は肉体的自然の法からの逸脱であるがゆえに、一定期間の売淫行為によってその逸脱を償」わなくてはならないからであった*14。さて、野獣的自然の中にあった「山」は今や去勢され、「社会的な相関構造」の中に固定されてしまった。かつて「山」では遊牧状態が理想とされたが（6章3連「人生はジプシー暮らし」）、この「町」では「家」を基盤とした「定住状態」が求められるようになる（9章3連「幸せを家へ招き入れる」、同7連「なんでもかんでも家へ持ち込む」）。

このような《быт》そのものの別荘地へ向けるツヴェターエワの視線は当然のことながら厳しいものである。この町には幸福も愛情もあるが、それは「空想のない愛」（9章4連）「血管が広がることもない愛」（同）「別れにもナイフにも飾られない愛」（同5連）であるとされる。つまりそれは、愛に伴う妄想や高揚感もなく、愛ゆえに傷つくこともない、いうなれば根源的なエロスに欠ける極めて《быт》的な「愛情」であるとツヴェターエワは非難しているのである。

いずれにせよ、「山」は蹂躪され、その廃墟の上に「町」が建つ。しかし本当に「山」は「町」に屈してしまっただろうか？9章6連にこんな一節がある。「罪は犯せるうちに犯せ！」・・・。「山」を冒涇して築いた罪深い「町」の幸福をおまえたちが堪能できるのも今のうちだ、というその不気味な予言には、すでに「山」の逆襲への予感が現れている。そしてその言葉通り、最後に

「山」の復讐劇が用意されているのである。10章に入ると、「山」は別荘地の下から突然火山のように目覚め、「憎しみの溶岩」を吹き上げながら「家族」たちへ襲いかかる。5連「豚どもよ、私の血の上で／おまえたちに豊かな土地のなきことを！」（Да не будет вам места злачного, / Телеса, на моей крови!）、6連「蟻どもよ、私の山の上で／おまえたちに地上の幸のなきことを！」（Да не будет вам счастья дольного, / Муравьи, на моей горе）などの「家族」たちへの呪詛の言葉は、著名なツヴェターエワ研究者カーリンスキーをして、「筆舌に尽くしがたい復讐心に燃える語調や、最終章に見られる破壊的な力は、多くの読者に反発を抱かせる」*15と評させるほど、その毒々しさはいささか唐突とも見えるが、実はこの部分は聖書の一節をパラフレーズしたものである。「その子らは父なし子となり、彼の妻はやもめとなるように。そして、その子らが必ずさまようことになるように。彼らは物乞いをし、その荒廃させられた場所から食物を捜し求めねばなりません・・・（Дети его да будут сиротами, и жена его — вдовою. Да скитаются дети его и нищенствуют, и просят хлеба из развалин своих...）」（詩編109:9-10）。詩編109は、この部分に限らず章全体が、「邪悪な者」への報いがあるように神に祈るという内容だが、ロシア語中に頻出する《だ+動詞3人称》「・・・でありますように」という文語的表現が「山の詩」でもそっくりそのまま使われていることがわかるだろう。このような聖書の模倣は、ここで再び6、7章と同様、「山」が「正統神」の地位を奪取したことを示唆している。墮落したエルサレムが神の裁きを受けるように、「天国」を冒涇した「町」は、今や覇権を奪い返した「山」という「神」の報いを受けなければならないのである。

ところでこの「山」の報いを受ける「別荘地」の描写に注視してみると、興味深いことに気づく。この別荘地は「家族の生い茂る丘」（2連3行）であり、「葡萄園」（3連1行）である。さてキリスト教の伝統では、葡萄は神の慈悲を象徴する果物であり、古来「楽園」のイメージと結びつけられてきた。例えば聖書では、神の恵みに感謝するくだりで次のような箇所が見られる。「神は荒野を葦の茂る水の池に、水のない地域の地を水の流れ出るところに変えられる。そして飢えた者たちをそこに住まわせる。彼らが居住の都市を堅く立てるようにされる。彼らは畑に種をまき、葡萄園を設ける。それが実り豊かな作物を産するためである（Засевают поля, насаждают виноградники, которые приносят им обилие плоды）。また、神が祝福されるので、彼らは非常に多くなる。（中略）神は貧しい者を苦悩から保護し、彼を羊の群れのようにいくつもの家族に変えられる（умножает род его, как стада овец）」（詩編107:35-41,下線は引用者）。あるいは創世記では、「神は彼らを祝福し、神は彼らに言われた。『子を生んで多くなり、地に満ちて、それを従わせよ』」（1:28）・・・つまり聖書によれば、「家庭」も「葡萄」も「神」の祝福によっても

たらされるのである。また、3連には「巨人を亜麻で／縛りつけることはできない（Великана — льном/ Не связать!）」という一節が見られる。「巨人」とは当然「山」を指し、これを縛りつける「亜麻」は従って「別荘地」の比喻であるが、「亜麻」はこれも聖書中では「聖なる衣」として描かれている。例えばレビ記16:4では、身を清める際には、「聖なる亜麻の長い衣（священный льняной хитон）を身に着け、亜麻の股引き（нижнее платье льняное）がその肉の上にあるべきである。また亜麻の帯飾り（льняной пояс）を締め、亜麻のターバン（льняной кидар）を巻くべきである。これは聖なる衣である。そして彼はその身に水を浴びてからそれを着けるように」とある。以上のことを考えると、「山」を掘り返して建てられた「別荘地」は、聖書、とりわけ旧約的な視点からすれば、神の恵みを受けた聖なる地、すなわち「樂園」だということになる。

しかしこの「樂園」がツヴェターエワにとってはむしろアンチ・ユートピアであることは、すでに見てきた通りである。すなわちここでツヴェターエワは、聖書的な「樂園」を、当の聖書を模した文体で呪うという、極めて冒瀆的な行為を企図しているのである。「樂園」であったはずの別荘地は、「ヴェズヴィオ」の圧倒的なエネルギーの前にあっさりと覆される。「巨人」はわが身を縛りつける「聖なる衣」を引きちぎり、再びその野獣性をあらわにする。そして別荘人たちを威圧しながら甦る、「第七の戒律の山」・・・。「第七の戒律」とは言うまでもなく、「姦淫するなかれ」。「姦淫」は「婚姻」に立脚した社会構造を揺るがせ、秩序のただ中に規律の及ばない「隙間」を生じさせる（それゆえ「戒律」によって封じられる）。「山」にはこのような「第七の戒律」を犯した「放蕩」者たちの「時が山積みになっている」（10章1連）のである。秩序化されたはずの「山」は、ここで再び「乱交と放縦」の時代を取り戻す。ちなみに、「獅子となって／葡萄園が覆る」（3～4連）という一節があるが、「獅子」は生まれて3日間を仮死状態で過ごし、やがて両親の吠え声で目を覚ますという伝承があったところから、「復活」を象徴する動物とみなされ、とりわけキリスト教世界では聖獣としてキリストの復活と結びつけられてきた*16。「異教」であったはずの「山」が「キリスト」のように復活し、「神」の恵みの「葡萄園」を覆す。6、7章でも用いられていた聖書の模倣という手法は、ここに至って完全に「正統」と「異端」を覆してしまう。そしてこれこそがまさに、ツヴェターエワの描こうとした「山」の物語だった。

さてこのように、「正統」的なるものへの挑戦という強い意図を持った「山の詩」だが、ここで私はかのイエス・キリストその人の姿を思い起こさずにはいられない。ツヴェターエワ自身、戒律や規範を憎む「異端者」を自負しつつ、なぜかキリストに対しては終始変わらぬ共感と敬意を抱いてきた。

| | |
|-----------------------------|-------------|
| Ты пишешь перстом на песке, | あなたは指で砂に書く |
| А я подошла и читаю. | わたしは歩み寄り、読む |
| Уже седина на виске. | はやこめかみには白髪 |
| Моя голова — золотая. | わたしの頭は黄金なのに |

(II , 277)

例えば1920年に書かれたこの作品は、ヨハネ8章のキリストをモチーフにしている。あるときイエスのところにパリサイ人たちが、姦淫の罪を犯した女を連れてきた。彼らはイエスを陥れようとして、モーゼは律法の中でこのような女を石打ちにせよと定めているが、あなたならどうするかと尋ねる。イエスは答えず、屈んで地面に指で何か書き始める。「彼らが執拗に尋ねると、イエスは身をまっすぐに起こして彼らに言われた。『あなた方の中で罪のない人が、彼女に対して最初に石を投げなさい』。そしてもう一度かがんで、地面に何か書き続けておられた。ところがこれを聞いた者たちは、年長者から始めて一人ずつ出てゆき、やがて彼一人、そして彼らの真ん中にいた女だけが残った。イエスは身をまっすぐに起こして言われた。『女よ、彼らはどこにいるのですか。誰もあなたを罪に定めなかったのですか』。『誰も、旦那様』。イエスは言われた。『私もあなたを罪には定めません。行きなさい。今からはもう、罪を習わしにしてはいけません』」（ヨハネ8:7-11）。ここに描かれているキリストは、数々の奇跡を行う全能の超人ではない。彼は「神」のように戒律を押しつけたり人を裁いたりせず、ただひたすらに「赦す」のみである。律法を引き合いに出して返答を求めるパリサイ人たちに対して、キリストはあえて黙秘を守り、彼らと同じ平面上に立つことを拒否する。ここでキリストは、唐突な「書く」という行為を持ち出すことによって、パリサイ人には自明のものと思われていた律法そのものの正当性に疑問を投げかけている* 17。

ここで改めて「山の詩」を振り返ってみると、この作品でツヴェターエフは、「町」の秩序と論理を「山」という「混沌」によって揺るがし、無化しようとして試みたのだった。このようなツヴェターエフの姿は、沈黙と書く行為によって（絶対的であると思われていた）律法に異議を唱え、これを無化してしまったヨハネ8章のキリストを彷彿とさせる。「正統的」な神に抵抗し、「正典」＝聖書を逆利用してまでこれを覆そうとした「山の詩」が、その根底的な部分でキリストと通じ合っているというのは一見矛盾のように思われる。しかし、旧約的なユダヤ世界の中で、硬直化した律法と闘い、これを「愛」によって克服しようとしたキリストは、元はといえば彼自身、「異端者」としてゴルゴダの丘で刑死したのではなかったか。

このような観点に立つとき、1章3連で「山」が、「籤引きされる胸」と比喩されている理由は自ずと明白になろう。「籤」といういささか唐突な形象は

明らかに、十字架にかけられたイエスの衣服を兵士たちが籤を引いて分配するエピソードを踏まえている（《Грудь, титанами разыгранная》というこの一節は、最初のヴァリエントで《Зря с титанами заигрываем》となっていたのを書き改めたものであり、ツヴェターエワが明確に意識してこの行を持ち込んでいることを示している）。また、「山の詩」の直後に執筆され、同じようにロジェーヴィチとの別れをテーマにした「終わりの詩」《Поэма конца》で、最終的な別れ＝「終わり」へと向かってゆくヒロインの姿に、ゴルゴダの丘へと向かうキリストのイメージが重ねられているのも、以上のような文脈から発していると考えてさしつかえあるまい。

ついには十字架を負ったキリストの物語さえをも飲み込んで、壮大な自己劇化の路程をひた走るツヴェターエワ。もしかするとほんのつまらぬ人間だったかもしれない男との恋愛の挫折——「五語の真実」——から始まった「神話」の底知れぬ大きさに、私たちは今もなおひるまされずにはいられない。

注

- 1.本文中に引用した作品はすべて Марина Цветаева, *Стихотворения и поэмы в пяти томах* (NY., Russica Publishers, 1980-) を使用。また、引用後に付したローマ数字は巻数を、アラビア数字は頁数を表す（例：「Ⅲ, 134」＝第3巻134頁）。なお、「山の詩」訳の作成にあたっては、「ヘルメス」41号（岩波書店、1993）掲載の亀山郁夫訳、及び有賀祐子「マリーナ・ツヴェターエワ『山の詩』解説の試み」（上智大外国語学部紀要27号、1992）を随時参照していることをお断りしておく。
2. *Воспоминания о Марине Цветаевой*, М., Сов. писатели, 1992, с. 316.
3. Владимир Сосинскийの回想による。op. cit. с. 372.
4. *Избранная проза в двух томах. 1917-1937.* (N.Y., Russica Publishers, 1979) T. 1, с. 358.
5. ツヴェターエワの作品におけるペルセフォネー神話のモチーフを研究したものとしては、Laura D. Weeks, "I Named Her Ariadna...": The Demeter-Persephone Myth in Tsvetaeva's Poems for Her Daughter (*Slavic Review*, vol. 49, №4, 1990, pp. 568-584)がある。
6. 例えば В. Швейцер, *Быт и бытие Марины Цветаевой* (Paris, Syntaxis, 1988), с. 310を見よ。
7. ペルーンと「山」がスラヴ伝承の中で密接なつながりを持つものとして描かれていることは、В. В. Иванов, В. Н. Топоров, *Исследования в области*

славянских древностей. Лексические и фразеологические вопросы реконструкции текстов(М., Наука, 1974), сс.7-12を参照されたい。

8. 中村喜和編訳『ロシア英雄叙事詩ブイリーナ』(平凡社, 1992)、作品解説より(p.386)。
9. Н.И.Кравцов, С.Г.Лазутин, *Русское устное народное творчество* (М., Высшая школа, 1977), с.151.
10. Иванов, Топоров, *op.cit.*, Часть 1.参照。ただしリュバコフはこの分析を根拠薄弱と批判している(Б.А.Рыбаков, *Язычество древних славян*, М. Наука, 1981, с.423)。ちなみに、ツヴェターエフはしばしば作品中で自らを蛇にもなぞらえているが、スラヴ世界では蛇は擬人化される場合「マリーナ」という名で呼ばれる(Иванов, Топоров, *op.cit.*, с.179)。
11. ペルーンのイメージが正教下のロシアで聖ゲオルギー信仰に流入したように、ヴォロス信仰は聖ニコラ信仰と結びついたと言われる。ところで「ニコラの日」(Николин день)は年に二回、すなわち旧5月9日と12月6日にあり、「ニコラは二つ、草のニコラと厳寒のニコラ(Два Николы: один с травой, другой с морозом)」等の言い回しが広く民間に流布する。ペルセフォネーの場合と同様、ニコラもまた「春」と「冬」という二面性を持っているのは興味深い。
см. В.Даль. *Месяцеслов. Суеверия. Приметы. Причуды. Стихии. Пословицы русского народа.* Лениздат, 1992, с.28.
12. たとえばパウロは、アブラハムと正妻サラの子イサクと、ハガルとの庶子イシュマエルについて、契約に属する子と奴隷の子という対置をしている(ガラテア4:22-28)。一方ツヴェターエフも1922年6月24日の作品《По загарам — топор и плуг》(III,16)で、《Сарра-заповедь》《Агарь-сердце》という対置をしているが、「戒律」を犯したハガルが《сердце》とされており、この両者に対するツヴェターエフの思い入れの違いを示している。
13. トニー・タナー『姦通の文学：契約と違反。ルソー、ゲーテ、フロベール』(高橋和久・御輿哲也訳、朝日出版社、1986) pp.102-115参照。
14. ヨハン・バッハオーフェン『母権論(序論・リキュア・クレタ)』(佐藤信行他訳、三元社、1992) p.44.
15. サイモン・カーリンスキー『知られざるマリーナ・ツヴェターエフ』(亀山郁夫訳、晶文社、1992) p.184.
16. ただし反対に、「獅子」がサタン、真理の敵を象徴するとされる場合もある(ペテロ第一5:8、テモテ第二4:17)。
17. ヨハネ8章の解釈に関しては、トニー・タナー、*op.cit.*, pp.44-47.参照。

(付録) 「山の詩」 《Поэма горы》 テクストと訳

Liebster, Dich wundert
die Rede? Alle Scheidenden
reden wie Trunkene und
nehmen gerne sich festlich...
Hölderlin

愛する人! 貴方はこの話に
驚くでしょうか? 別れゆく者は
誰しも酔ったように語り、
自分を晴れがましく見せたがるものなのです
—— ヘルダーリン

ПОСВЯЩЕНИЕ

Вздоргнешь — и горы с плеч,
И душа — горё.
Дай мне о горе спеть:
О моей горе!

Черной ни днешь, ни впредь
Не заткну дыры.
Дай мне о горе спеть
На верху горы.

1

Та гора была как грудь
Рекрута, снарядом сваленного.
Та гора хотела губ
Девственных, обряда свадебного

Требовала та гора.
— Океан в ушную раковину
Вдруг-ворвавшимся ура! —
Та гора гнала и ратовала.

Та гора была как гром!
Грудь, титанами разыгранная!
(Той горы последний дом
Помнишь — на исходе пригорода?)

献辞

身震いすれば—— 重荷は消え
魂は—— 天へ!
私に悲しみを唄わせて
私の山を唄わせて

今も、こののちも
この黒い穴を取り繕ったりはしまい
私に悲しみを唄わせて
この山の頂で

1

あの山は銃弾に倒れた
新兵の胸
あの山は無垢の
唇を欲し 婚礼の儀式を

あの山は求めた
——それは耳の貝殻にふいに闖入し
雄叫びとなって響く海原! ——
あの山は追い、闘った

あの山は雷鳴
この胸は巨人たちの籤の懸賞!
郊外の出口の
あの山の最後の家を覚えている?

Та гора была — миры!
Бог за мир взывает дорого!

. . .

Горе началось с горы.
Та гора была над городом.

2

Не Парнас, не Синай,
Просто голый казарменный
Холм. — Равняйся! Стреляй! —
Отчего же глазам моим
(Раз октябрь, а не май)
Та гора была — рай?

3

Как на ладони поданный
Рай — не берись, коль жгуч!
Гора бросалась под ноги
Колдобинами круч.

Как бы титана лапами
Кустарников и хвой —
Гора хватала за полы,
Приказывала: стой!

О, далеко не азбучный
Рай — сквознякам сквозняк!
Гора валила навзничь нас,
Притягивала: ляг!

Оторопел под натиском,
— Как? Не понять и днесь! —
Гора, как сводня — святости,
Указывала: здесь...

4

Персефоны зерно гранатовое,
Как забыть тебя в стужах зим?

あの山は——世界だった!
神は世界と引き換えに高い代償を取り立てる!

. . .

悲しみは山から始まった
あの山は街を見おろしていた

2

Парнаццосусでもシナイでもない
ただむきだしの兵營のような
丘陵——整列! 撃て! ——
どうしてこの目に
(時は十月で五月ではないというのに)
あの山は天国だったのか?

3

掌に乗せて差しだされたような
天国——手に取ってはだめ、熱いの中から!
山は足元に身を投げ出すのだった
断崖のくぼみとなって

巨人のような
灌木と針葉の手で
山は裾をつかみ
命じるのだった 「止まれ!」と

ああ、およそ平明ならぬ
天国——隙間風が吹きぬけてゆく!
山は私たちを仰向けに押し倒し
引き寄せた 「横たわれ!」と

その威力に⁵⁰⁵唾然とし
なぜ? 今もわからぬ!
山は女衞が無垢に命ずるように
指さした 「ここだ」と...

4

ペルセフォネーのざくろの実よ!
冬の凍てつきの中、どうしておまえが

Помню губы, двойною раковиной
Приоткрывшиеся моим.

Персефона, зерном загубленная!
Губ упорствующий багрец,
И ресницы твои — зазубринами,
И звезды золотой зубец.

5

Не обман — страсть, и не вымысел!
И не лжет, — только не дли!
О когда бы в сей мир явились мы
Простолюдинами любви!

О когда б, здраво и попросту:
Просто — холм, просто — бугор...
Говорят — тягую к пропасти
Измеряют уровень гор.

В ворохах вереска бурого,
В осторовах страждущих хвой...
(Высота бреда — над уровнем
Жизни)

— На же меня! Твой...

Но семьи тихие милости,
Но птенцов лепет — увы!
Оттого что в сей мир явились мы —
Небожителями любви!

6

Гора горевала (а горы глиной
Горькой горюют в часы разлук),
Гора горевала о голубиной
Нежности наших безвестных утр.

忘れられよう?

その唇を覚えている、二枚貝のように
この唇へと微かに開かれた唇を

実ゆえに滅んだペルセフォネーよ!
唇の褪せることなき茜色
そして刃こぼれのようなおまえのまつげと
星の黄金の齒

5

情熱は偽りではない、空想でもない
それは嘘をついたりしない
——ただし長引かせるな!
ああ、いつになれば私たちはこの世に
ただの愛し合う二人として生まれるのか!

ああ、いつになれば理性的に簡単に
言えるようになるのだろう
「あれはただの丘、ただの小山」と・・・
(人は言う、奈落への憧れにより
山の高さは測られるのだと)

褐色のヒースにうずもれて
苦悩する針葉の島々の中で
(譫妄は生活よりも
はるかに高く)
——僕を取るがいい! 君のものだ・・・

けれど家庭の静かな慈愛が
けれどひなたたちのさえずりが——ああ!
——だからこそ私たちはこの世に——
愛し合う天上人として生まれたのだ!

6

山は嘆いた (苦い粘土の涙で
山は別れの時に泣く)
山は嘆いた、私たちの名もない朝の
鳩の優しさを

Гора горевала о нашей дружбе:
Губ непреложнейшее родство!
Гора говорила, что коемужды
Сбудется — по слезам его.

山は嘆いた、私たちの友情を
それは唇の揺るぎなき血の絆!
山は言った、各々の願いは
その涙のままにかなう、と

Еще горевала гора, что табор —
Жизнь, что весь век
по сердцам базарь!
Еще горевала гора: хотя бы
С дитяком — отпустил Агарь!

さらに山は言った、ジプシー暮らしこそ
人生 死ぬまで
心から心へと行商して暮らせ!
さらに山は嘆いた、子供と一緒にとはいえ
ハガルを追放するなんて!

Еще говорила, что это демон
Крутит, что замысла нет в игре.
Гора говорила. Мы были немые.
Предоставляли судить горе.

さらに言った、これは悪魔の仕業
戯れにたくらみはない、と
山は語り、私たちは口もきけず
裁きを山にゆだねるのだった

7

Гора горевала, что только грустью
Станет — что ныне и кровь и зной.
Гора говорила, что не отпустит
Нас, не допустит тебя с другой!

7

山は嘆いた、今は血でも炎でも
なべて悲しみとなるだけ、と
山は言った、私たちを行かせたりはしない
おまえを他の女に渡しはしない、と

Гора горевала, что только дымом
Станет — что ныне: и Мир, и Рим.
Гора говорила, что быть с другими
Нам (не завидую тем, другим!).

山は嘆いた、今は世界でもローマでも
ただ煙と消えるだけ、と
山は嘆いた、私たちは別の者たちと
生きることになろう、と
(「別の者たち」にはお気の毒だけど!)

Гора горевала о страшном грузе
Клятвы, которую поздно клясть.
Гора говорила, что стар тот узел
Гордиев: долг и страсть

山は嘆いた、おそるべき誓いの重さを
呪うには遅すぎる誓いの重さを
山は言った、かのゴルディオスの結び目
——義務と情熱——などもう古いのに、と

Гора горевала о нашем горе:
Завтра! Не сразу! Когда над лбом —
Уж не *memento*, — а просто — *more!*
Завтра, когда пойдем.

山は嘆いた、私たちの悲しみを——
明日に! すぐにではなく! 額の上に——
もはや *memento* ではなく
——ただ海が広がるときに!
明日になれば私たちにもわかるだろう、と

Звук... ну как будто бы кто-то просто,
Ну... плачет вблизи?
Гора горевала о том, что врозь нам
Вниз, по такой грязи —

В жизнь, про которую знаем все мы:
Сброд — рынок — барак.
Еще говорила, что все поэмы
Гор — пишутся — так.

8

Та гора была, как горб
Атласа, титана стонущего.
Той горою будет горд
Город, где с утра и до ночи мы

Жизнь свою — как карту бьем!
Страстные, *не быть* упорствуем.
Наравне с медвежьим рвом
И двенадцатью апостолами —

Чтите мой угрюмый грот.
(Грот — была, и волны впрыгивали!)
Той игры последний ход
Помнишь — на исходе пригорода?

Та гора была — миры!
Боги мстят своим подобиям!
. . .
Горе началось с горы.
Та гора на мне — надгробием.

音がする・・・まるで誰かが、ただ——
そう・・・近くで泣いている?
山は嘆いた、私たちが別々に
ぬかるみを通して
下界へと降りてゆくことを

誰にもおなじみの生活へと
群衆——市場——バラックへと
さらに言った、山の詩はみな
こうして書かれるのだ、と

8

あの山は呻き苦しむ
巨人アトラスの瘤
街はあの山を誇るだろう
我らが朝な夕な

カードのように
己の生活を打ち負かす街は!
我ら情熱の者たちは
かたくなに在らざり続ける
熊の塚や
十二使徒とも等しく

我が陰鬱なる岩窩を敬え
(岩窩、私はいた——
そして波々がはねていた!)
郊外の出口の
あのゲームの最後の一手を
覚えている?

あの山は——世界だった!
神々は己の似姿に復讐する!
. . .
悲しみは山から始まった
あの山は私の上におかれた墓標

Минут годы. И вот — означенный
Камень, плоским смененный, снят.
Нашу гору застроят дачами,
Палисадниками стеснят.

Говорят, на таких окраинах
Воздух чище и легче жить.
И пойдут лоскуты выкраивать,
Перекладинами рябить,

Перевалы мои выструнивать,
Все овраги мои — вверх дном!
Ибо надо ведь хоть кому-нибудь
Дома в счастье, и счастья — в дом!

Счастья — в доме! Любви
без вымыслов!
Без вытя—гивания жил!
Надо женщиной быть — и вынести!
(Было-было, когда ходил,

Счастье — в доме!) Любви,
не скрашенной
Ни разлукою, ни ножом.
На развалинах счастья нашего
Город встанет: мужей и жен.

И на том же блаженном воздухе,
— Пока можешь еще — греши! —
Будут лавочники на отдыхе
Пережевывать барыши,

Этажи и ходы надумывать,
Чтобы каждая нитка — в дом!
Ибо надо ведь хоть кому-нибудь
Крыши с аистовым гнездом!

Время переживая, встанет
время переживая, встанет
время переживая, встанет
время переживая, встанет

人は言う、こういう郊外って
空気もきれいだし住みやすいわね、と
そして土地を裁ち
梁で痘痕をうがちに行くのだ

私の峠をしめあげるために
私の谷を掘り返すために!
人は誰でも必要としているから
家で幸せにぬくもることを
幸せを家へ招き入れることを!

家の中には幸福! 空想のない愛
血管が広がることもない!
女らしく——耐えねばならぬ!
(昔々、おまえがいた頃

家の中には幸せがありました!)
別れにもナイフにも飾られない愛
私たちの幸せの廃墟に
町は起つだろう
——夫たちと妻たちの町が

そして変わらぬ至福の空の下
——罪は犯せるうちに犯せ! ——
店の主たちは休日に
儲けを反趨しながら

フロアや廊下を作り出す
なんでもかんでも家へ持ち込むために!
人は誰でも必要としているから
コウノトリが巣をかけた屋根を

Но под тяжестью тех фундаментов
 Не забудет гора — игры.
 Есть беспутные, нет — беспамятных:
 Горы времени — у горы!

По упорствующим расселинам
 Дачник, поздно хватясь, поймет:
 Не пригорок, поросший семьями, —
 Кратер, пущенный в оборот!

Виноградниками — Везувия
 Не сковать! Великана — льном
 Не связать! *Одного* безумия
 Уст — достаточно, чтобы львом

Виноградники за—ворочались,
 Лаву ненависти струя.
 Будут девками ваши дочери
 И поэтами — сыновья!

Дочь, ребенка расти внебрачного!
 Сын, цыганкам себя страви!
 Да не будет вам места злачного,
 Телеса, на моей крови!

Тверже камня краеугольного,
 Клятвой смертника на одре:
 Да не будет вам счастья дольного,
 Муравьи, на моей горе!

В час неведомый, в срок негаданный
 Опознаете всей семьей
 Непомерную и громадную
 Гору заповеди седьмой!

けれどその礎の重みの下で
 山は戯れを忘れはしない
 放蕩はしても記憶は確か
 この山には時が山積みになっている!

消えることのない割れ目に
 別荘人たちは遅まきながら気づき、
 解するだろう
 それは家族が生い茂る丘ではなく
 目覚め始めた噴火口だということに!

ヴェズヴィオを葡萄園で
 繋ぎとめることはできない! 巨人を亜麻で
 縛りつけることはできない! 唇の
 狂気だけで充分 獅子のように

憎しみの溶岩を流しながら
 葡萄園がくつがえるのには
 おまえたちの娘は淫売になり
 息子は詩人になるだろう!

娘よ、私生児を育てるがいい!
 息子よ、ジプシー女にうつつを抜かせ!
 豚どもよ、私の血の上で
 おまえたちに豊かな土地のなきことを!

礎石よりも堅く
 臥所の死刑囚の呪いで
 — 蟻どもよ、私の山の上で
 おまえたちに地上の幸のなきことを!

知られざる時、思わざる時
 家族中が知るだろう
 途方もなく巨大な
 第七の戒律の山を

ПОСЛЕСЛОВИЕ

あとがき

| | |
|---|---|
| Есть пробелы в памяти — бельма На глазах: семь покрывал. Я не помню тебя отдельно. Вместо чёрт — белый провал. | 記憶には空白があり、目には 内障がある それは七つの覆い・・・ 離れてはおまえを思い出せない 輪郭の代わりに——白い喪失 |
| Без примет. Белым пробелом — Весь. (Душа, в ранах сплошных, Рана — сплошь.) Частности мелом Отмечать — дело портных. | 特徴もなく おまえの全ては—— 白い空白となって (一面傷を負った魂 傷が——面に) 白墨で細部に 印をつけるのは——仕立て屋の仕事 |
| Небосвод — цельным основан. Океан — скопище брызг?! Без примет. Верно — особый — Весь. Любовь — связь, а не сыск. | 天には継ぎ目もなく 大洋は——飛沫の群れか? 特徴がない そうだ、おまえはその全身が 特別だった 愛は絆 探し回るものではない |
| Вороной, русой ли масти — Пусть сосед скажет: он зряч. Разве страсть — делит на части? Часовщик я, или врач? | 黒毛か、それとも栗毛か——そんなことは 目の見える隣人に言わせればいい 情熱を部分に分割できるはずもない 私は時計屋でも医者でもない |
| Ты как круг, полный и цельный: Цельный вихрь, полный столбняк. Я не помню тебя отдельно От любви. Равенства знак. | おまえは欠けるところのない円 分かつことのできぬ嵐 全身の茫然 私はおまえを思い出せない、愛と 離れては それは等号 |
| (В ворохах сонного пуха: Водопад, пены холмы — Новизной, странной для слуха, Вместо: я — тронное: мы...) | (眠たげな羽根に埋もれて ——滝、泡沫の丘々—— 耳なれぬ新しさで響く 「私」のかわり 玉座についた「我ら」・・・) |
| Но зато, в нищей и тесной Жизни: 《жизнь, как она есть》 — Я не вижу тебя совместно Ни с одной: — памяти мечь! | けれど貧しく狭い 生活の中で——「あるがままの生活」—— 私はおまえの姿を見ない 他の女といるおまえを ——記憶の復讐! |